

令和4年度すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム報告書

1 趣旨

墨田区における地域福祉の推進とボランティア活動への参加促進を図るため、民生・児童委員、ボランティア活動者、小地域福祉活動参加者、福祉施設・福祉事業者など地域福祉とボランティア活動の関係者や活動に関心を持つ者等が一堂に会し、地域福祉・ボランティア活動について一緒に学び、考え、交流し、広く活動への参加を呼びかける。

令和4年度は「踏み出す一歩 つながる思い」をテーマに開催した。

2 日時

令和4年7月2日(土)午後1時から午後4時まで

3 場所

すみだリバーサイドホール イベントホール

4 内容

- (1) 講演
- (2) グループディスカッション
- (3) まとめ・講評
- (4) 第4次墨田区地域福祉計画の紹介

5 主催

すみだ地域福祉・ボランティアフォーラム実行委員会、墨田区、墨田区社会福祉協議会

6 参加者数

所属等	人数
町会・自治会関係	1名
民生・児童委員	18名
ボランティア・個人	36名
高齢者支援関係者	3名
興望館関係者	10名
実行委員	11名
厚生課職員	10名
墨田区社会福祉協議会職員	10名
区長・墨田区社会福祉協議会会長・講師	3名
合計	102名

7 概要

(1) 司会者紹介

今年度は実行委員の伴委員、八重田委員が司会者でした。

(2) 開会挨拶

開会にあたり、鎌形実行委員長、山本墨田区長、西原墨田区社会福祉協議会会長から主催者の挨拶がありました。

(3) 講演

テーマ：With コロナ時代の地域福祉

講師：小柴 徳明 氏（富山県黒部市社会福祉協議会）

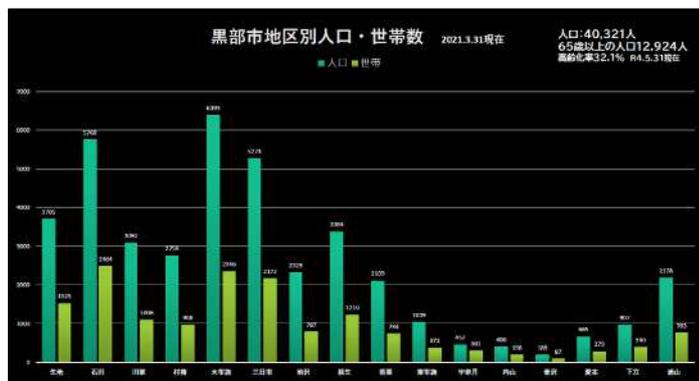


【小柴氏・黒部市の紹介】

小柴氏は全寮制の児童自立支援施設での勤務後、黒部市社会福祉協議会の職員の募集があり、応募・就職した。新任職員研修において、講師から「福祉の仕事は幸せ・幸福を作るお手伝いをする」とを教わり、現在まで19年務めている。

黒部市は高齢化率が32.1%であるが、16の小学校区でみると、大布施は若い世代が多い一方で、世帯数の少ない地区は高齢化率が45%であり、地域によって課題が異なる。このことから、黒部市全体という扱いではなく、地区ごとの小地域活動が重要であると考えている。

黒部市社会福祉協議会の経営理念は「誰もが安心して暮らせるやさしい福祉のまちづくりの推進」であり、現在の重点テーマは「役割を担う支援者が支援しやすい環境づくり」としている。ただし、「人」「物」「金」がなく、地域の力が弱くなっている現状では、担い手（支援者）を育てるだけでなく、自らも関わり、且つ地域の力（社会関係資本）を十分に活用していく必要がある。



ということは(地域の現状)...

- 担い手を育てるし、自分もやる。
(社協・地域も思いは同じ)
- 地域には、仕事と志事が必要。
(社協職員とNPOもやる@個人)
- 無いものはつくる。
(できることをやる、つくる)
- みんなでやるしかない。
(ALL黒部:行政・社協・企業・社会福祉法人・NPO法人・ボランティア・市民 etc.)

地域の力 ↓
社会関係資本(social capital)をフル活用するしかない

【地域の力の活用】

地域の力を上手く活用するには、ゴール、根拠、ものさし(指標)を明確にし、住民に理解してもらう必要がある。富山県及び黒部市には「富山県の元気とやま創造計画」、「黒部市総合計画」、「第2次黒部市地域福祉活動計画」があるが、読まれる機会が少ないことから、5つのゴールをシンプルに作り、住民に理解・浸透されるように取り組むこととした。また、ゴールに向けた活動計画を策定する会議については、承認制から参加型のグループワークによる手法へ変え、子育てをしている20代から地域で活動する80代の方まで幅広く参加してもらい、各属性における課題を互いに聞きあい、知る機会を設けながら進めた。

また、住民主体のまちづくりについて、良い視点で見られる一方で「行政・社協が丸投げしている」とみられることもある。民生委員の見守り活動を例にとると「見守り」の一方で「監視」とも捉えられることもある。義務かボランティアなのか、紙一重の部分をもどのように取り組むかが重要である。



【With コロナ時代の地域福祉】

コロナ禍における地域福祉活動は、「触れるな・集うな・距離をとれ」という条件の下では非常に難しい。各事業を単に「実施する」・「実施しない」という視点で考えるのではなく、コロナをきっかけに「なぜ実施するのか」「何のために実施するのか」という目的を明確にしてから始めることが重要である。また、福祉に携わる方はICTが苦手、福祉とICTは真逆のイメージがあるが、職場で印鑑を使っている一方で、家庭ではIT環境が豊富である。つまり、生活にも職場にもICTは活用でき、どのように使っていくかが重要である。

【事例 地域福祉にICTを活用：獅子舞デジタルアーカイブ】

単に獅子舞の動画をアップロードするのではなく、継承者がどのように後世に伝えてきたかインタビュー形式の動画として制作し、その思いや歴史を全世界の人にも観てもらおう取り組みを行っている。

【事例 地域にいるプロの力を借りる：LINE WORKS】

地域における情報伝達はFAXや電話が中心であったが、「LINE WORKS」を活用した情報共有の導入を検討したところ、地域の高齢者にとってはスマートフォンの操作に苦手意識があった。そこで、地域の高校生の力を借りて、20人程度の高齢者を対象にスマートフォンの使い方を教えてもらう取り組みを実施したところ、良い反響があった。



【まとめ】

ICTを活用した情報伝達の仕方や地域にいるプロの力を借りるという視点から、各事業を進めてきたことで、地域にはまだまだ知らないヒト・モノがあることに気付いた。これらをフル活用して地域全体で地域福祉を進めていく必要がある。また、「同時に自分たちのまちは、自分たちで良くしていく」という言葉があるが、行政・社協が地域住民の参加を促すとともに、地域住民も積極的に参加していく必要がある。

(4) グループディスカッション【新たな日常を踏まえた“つながり支援”】

新型コロナウイルス感染症の影響により、人の移動や対面が制限され、つながりの希薄化が問題となっている中、講演の内容や普段感じていることを踏まえて参加者同士で話し合いました。

各グループ約6人でグループディスカッションを行い、区職員・社会福祉協議会職員がファシリテーターとして進行を務めました。



【コロナ禍での地域福祉の課題・問題の共有】

- ・新型コロナウイルス感染拡大の影響により、人と会うことや講座・イベント等の機会が少なくなり、家にこもりがちになったり、世代間交流ができなくなってきた。集まれる場所の大切さに気付いた。
- ・一人ひとりの意識が違うため、イベントの開催が難しい。
- ・地域活動が明らかに縮減したため、地域に活気がなくなってしまうことや新しい活動者が増えないといった問題がある。
- ・オンラインによるつながりは増えてきたが、使えない人もいる。
- ・マスクをしていると表情が見えない。
- ・外出するきっかけを無くしていた方は、コロナにより更に外出のきっかけを失った。

【つながり支援に向けて】

- ・ICT化について、高齢者は必要でないと思うと興味がある人以外は知ろうとしない。必要だからではなく、楽しさを感じてもらい、簡単なことから始められたら良い。昔遊びに興味のある小学生は多いので、小学生がタブレット端末の使い方を教え、高齢者が昔遊びを教えるような合同イベントを考えてはどうか。高齢者を通じて雑談等をきっかけにアプローチすることも考えられる。
- ・ICTと対面(Face to Face)は対立するものではなく、互いのメリットを地域の活動に活かしていく。
- ・掲示板や回覧板を見る方もいるので、引き続き大切にしていこう。特に掲示板に貼るポスターは大きく目を引きやすいものが良い。
- ・コロナ禍の取り組みとして、子どもたちがウクレレを演奏し、その動画を施設に届けたが好評だった。
- ・地域の中で、挨拶をすることや火の用心等の誰でも参加できるイベントを実施し、つながるきっかけを作る。
- ・本フォーラムには若い世代の参加者がいる。このような若い世代を増やしていくために、40～50代が動き、機会やきっかけを作っていくことが必要である。幼少期から地域福祉を身近に感じてもらえるようなベース(環境)をつくってはどうか。
- ・コロナ禍でも活動を続けられたところもあるが、なかなか情報が入ってこない。良い活動は積極的に情報発信をすべきである。
- ・情報が届かないことも考慮し、人からの口コミも大切にしたい。
- ・自分が身近にできることを「目的」と「手段」を明確にしたうえで探してみる。
- ・ICTの使い方等を学ぶことが難しい人もいると思うが、講演中の「年齢にとらわれない身近なプロ」を探すという視点はとても大切だと思う。

(5) まとめ・講評

各グループで話しあったことを4グループの代表者に発表していただきました。

ア グループ 南 雄策 氏

新型コロナウイルス感染症の影響により、今までつながっていた人との関わりが希薄になったという意見や感染症対策のマスクで表情が見えなくなったことにより、全年齢に影響が出ているという意見があった。イベントや町会のお祭り等も中止や縮小となっていることから、グループ内では集まれる・参加できる場所が大事であると認識した。ICTについて、朗読ボランティアの方からは、話した内容を文字化するアプリは受け手側との認識のズレが生じるという意見がある一方で、世代を越えた交流がいつでも可能であり、幅広い世代に情報伝達等ができるという意見があった。

イ グループ 高橋 信道 氏

地域(町会)の行事ができなくなり、新しい役員も入らなくなっている状況から自治体の行事を参考に With コロナの中でどのような活動ができるか検討する必要があるとの意見があった。また、つながり支援に向けて、地域の中で挨拶をしっかりとっていく必要があるという意見もあったが、昨今の不審者等の事情も考慮して、まずは知っている人に挨拶を行い、少しずつ地域住民がお互いに知りあえる機会を作っていくと良いのではないかと提案もあった。地域の活動を通して、偶然あるいは何かのついでに知ったということが大事であると感じた。また、ICT化について、ZOOMは遠方の人でも交流できるメリットがあるが、対面に勝るものはないので、両者のバランスを踏まえて進めていく必要があるとの結論が出た。

ウ グループ 村上 聡 氏

コロナ禍で外に出てこれない人が心配だという意見やボランティア団体の中でも、活動できた団体とできなかった団体があるため、コロナ禍でもできることを考える必要があるという意見があった。つながり支援について、紙には紙ならではの良さがあるが、単に文字が羅列されているだけにならないように、ターゲットや目的をはっきりさせることが重要との意見があった。今回のフォーラムのような地域の人が互いに知り・知りあう場、得意を持ちあえる場、情報発信の見える化がされている機会というのは重要であると感じた。

また、伝えただけではなく、しっかりと伝わったかが重要であり、紙の良さ、デジタルの良さ、出てこれない人へのアプローチをどうするか想像しながら進める必要があるとグループ内で認識した。

エ グループ 五十嵐 美奈 氏

グループはボランティア活動をしている方の体験談から話が広がった。グループ内に週5日ボランティア活動している方がおり、活動内容には「お茶を入れる」、「食事を作る」、「折り紙教室の助手」等の比較的簡単な活動も行っていることから、これからボランティア活動を考える人へのアプローチにもなった。グループディスカッションを通じて、知り合いがいないと活動に不安を感じるが、誰かが自分を待っていると思いながら、一步を踏み出していくことも大切であると気付いた。また、地域の人得意な事を活かせる場の提供やボランティア活動を希望している人と支援される人を上手くマッチングさせる仕組みがあればより良くなると思う。

【講評(小柴氏)】

各グループの構成は、世代や活躍している場が異なるよう組まれているように感じた。本日のグループディスカッションをきっかけにして、例えば自分の団体にフィードバックしたり、違う世代に話を聞

いてみる等、発展していけると良い。地域には若い世代がないと言われるが、実際にはいるので、彼らを取り入れていくことが大事である。ただし、各世代での「若者・高齢者」、「地域」の定義は異なることから、話し合いの場では各々の定義を決め、互いの認識のズレを無くすことが重要である。

(6) 第4次墨田区地域福祉計画の紹介

令和3年度に墨田区地域福祉計画推進協議会会長として、第4次計画の策定に携わった社会福祉法人興望館理事長 野原健治氏から、本計画の概要版を用いながら紹介をしていただきました。



(7) エンディング

墨田区社会福祉協議会栗田事務局長から、挨拶があり閉会となりました。

8 その他

(1) 実行委員会の開催

本フォーラム実施に向け、「すみだ地域福祉ボランティアフォーラム実行委員会」を設置しました。

回数	日時・場所	内容
第1回	4月19日(火) 午前10時 81会議室	役員選出、内容・テーマの検討
第2回	4月27日(水) 午前10時 すみだボランティアセンター	内容・チラシの検討
第3回	5月19日(木) 午前10時 31会議室	チラシの決定、役割分担
第4回	6月10日(金) 午前10時 31会議室	役割分担、参加者配布資料の確認
第5回	書面により実施(6月末)	配布資料の事前送付及び最終確認

(2) 実行委員(敬称略)

鎌形 由美子(委員長)	伴 道子	高橋 信道	内田 正代
五十嵐 美奈(副委員長)	林 佳慧	八重田 裕一郎	若菜 進
南 睦美	鈴木 一郎	栗田 陽	若林 三穂

(3) 広報

墨田区のお知らせ(6月21日号) すみだ社協だより(6月号) 墨田区ホームページ、墨田区社会福祉協議会ホームページ、チラシの配布等により、PRを行いました。

